United World College South East Asia（UWCSEA）訪問

日本女子大学附属豊明小学校　学年主任　桑原　正孝

１　はじめに

私立学校教員海外研修団は、8 月 25 日、視察先でインターナショナルスクールである United World College South East Asia（以下 UWCSEA）を訪問した。エントランスより校舎入口のフロアに向かう階段には、教育の使命として「教育を平和と持続可能な未来に向けて人々や国家、文化を結びつける力にする」と記されていた。

シンガポール国内に 2 つのキャンパスを持つ UWC はイギリスのウェールズにルーツを持つ NPO であり、国際的な環境の中での全人教育を重視している。世界中に 18 のキャンパスがあるうち、今回訪れたシンガポール・ドーバーキャンパスは最大規模となっている。ドーバーキャンパスには約 3,000 人の児童・生徒が通い、9 月入学で主に 4 歳（K1）～18 歳（G12）までが学んでいる。

・Primary School（K1-G5）
・Middle School（G6-G8）
・High School（G9-G12）

図１ 学校の概要について説明を受ける

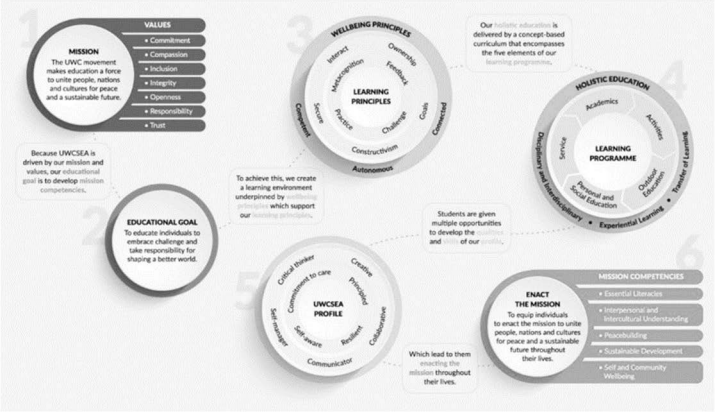

図２ UWCSEA の教育の指針

２　学校の概要とその教育理念について

まず、キャンパス長である Mr.Patrick Hurworth による学校紹介が行われたがその内容を交えながら概要を紹介したい。シンガポール国内に設置された 2008 年開校のイーストキャンパスのモダンな建築に比べ、1971 年に開校した約 11ha の緑豊かなドーバーキャンパスは、サスティナビリティーを大切にして手直しを加えながら発展させている学び舎であるとのことであった。

そして創立についてはオーストリアの教育学者 Kurt Hahn（1886-1974）による第二次世界大戦前からの国際主義、挑戦、責任と奉仕の４つの柱を基盤とした教育運動との関連に言及した。教育の目標について、「明確に考え、知的推論を使って

問題を解決し、合理的な決定を下す能力の育成」「個々の子どものユニークな可能性を育み、創造性や感受性の発達を促しながら、誠実さ、学習と自己実現に向かう気持ちの励まし」「学習者のニーズと能力を診断し、段階的にスキルとコンピテンシーを開発する教育戦略を設計する」「社会に貢献する市民になるために必要な基本的知識、スキル、学問的概念、価値観を若者に伝える」「重要な問題、環境問題についての強い意識を持たせることによって、社会の存続のための責任と改革の意識を育む」の５つを挙げ、子どもたちとの交流の中で常にこの目標を見失わないようにしているとのことであった。

教育の指針の詳細は図２のように、①UWCSEA の教育活動としてのミッションが 7 つの価値として示され、これに基づいて②教育の目標を設定し、③学びの原則、④学びのプログラム、⑤UWCSEA のプロファイル（卒業時の理想像）、⑥ミッションの（生涯にわたる）実践という流れとしてまとめられていた。UWCSEA の教育の特色でもある国際バカロレア認定校にふさわしくコンセプトベースの教授と学習についてスライド資料（図 3）に基づいて説明があったが、Mr.Hurworth はそれを「大きな概念やアイデアを考える能力を身につけてほしい」「子どもたちが学びの中心であり、ただの情報の受け皿ではない」と端的に表現していたことが印象的であった。また、卒業時の理想像としてはレジリエンスのある人、誠実な人間、自己認識があり思いやりのある人になってほしいと願っていることであった。また、批判的思考と創造性を持つことを大切にしているので、教える時にも答えは一つではないということを意識しているということであった。さらには色々な場所や状況を設定して活動することにより、協働することについて学び、自分の成功のために責任を持って参加することも大切にしているということであった。加えて、学びのプログラムについては全人教育を主軸といるが、学際的であることの重要性、他者に恩恵をもたらす学び、個別的かつ社会的な学び、教室以外での交流を持つ学び、活動を伴う学び、Outdoor Education というキーワードについて説明があった。

Concept based teaching and learning

IS NOT	IS
Teaching for recall	Teaching for **conceptual understanding**
Learning that is fixed in time & place	Learning that **transfers** to new situations
Telling students the big ideas	Guided **Inquiry** student ownership, voice, choice and agency
Content-free	Impossible without content (**Knowledge & skills** support the development of understanding)
Just about WHAT we teach	Also about **HOW we teach** (ie curriculum + pedagogy)

図３ コンセプトベースの教授と学習に

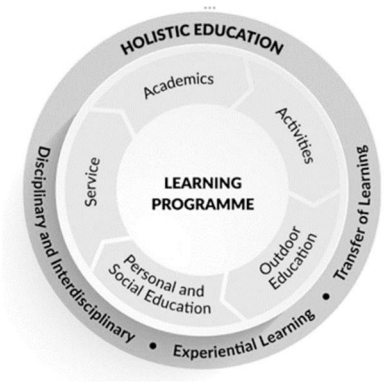

図４ Outdoor Education

３　Outdoor Education の目的と内容

Mr.Hurworth は教育の特色である Outdoor Education について非常に力点を

置いてか説明してくださったのだが、それも UWCSEA は世界標準の学力を身につける学習課程において、さまざまな課外活動と心身を鍛錬するアウトドア教育、社会貢献活動など幅広い取り組みに定評があるからであろう。シンガポールの地域社会や海外での実体験を通じた学びにより、主体性とリーダーシップを育むことを目指しているといえる。

この Outdoor Education について私は、初等教育の立場から質問を投げかけながらその教育内容の例を低学年の様子中心に伺ってみることにした。Mr.Hurworth によれば低学年は、主にチーム作りの活動をするということであった。具体的な活動としては 1 年生であれば、テントを立てたりすることから始まり、キャンパスの外でお泊りをする、休みの期間でもキャンパス外の活動を行うなどの事例が紹介された。今日の社会において、社会的に弱い立場の人々への奉仕はとても重要で、それには知識を活用し、共感と優しさを持ち自分の良さを発揮できることが Outdoor Education を重要視する所以であるということであった。

奉仕については、これを「幼稚園の段階から実践を始める College service」「地域で水泳の補助をするような Local service」「他国へ赴いて行う Global service」という 3 段階に捉えていると述べた。またこれを「効果的である」「必要に基づいている」「友好的である」「計画的である」「現実に即している」「文化への理解に基づく」「国際的である」「振り返り」「持続可能性」「生徒主導」の 10 の視点にしてそれを育んでいる（図 5 参照）と説明した。さらに、「生徒自身が活動を設計しているのであって、私たち教員の方から何をしたらよいか教え込むことはしない」ということであった。

彼のプレゼンの最後に示した 1 枚の写真はシュノーケルを身につけて水中に入り、植物の環境を守るための調査を行なっている生徒の様子であったが、Mr.Hurworth は「これこそが学際的な学びが Outdoor Education によって行動と一体となって進められるという UWCSEA の教育をよく示している」と語った。

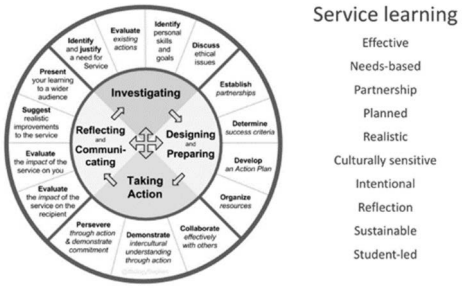

図５ Service learning について

図６ Rainforest Section の様子

プレゼン終了後に、さらに我々から幼児教育や初等教育でどのような方法で授業を進めているのかを深掘りして尋ねてみると、幼稚園では遊びを中心に、物事を探索すること、レッジョ・エミリア式の教育などを取り入れて始め、徐々に数学的な能力、識字的な能力などを伸ばしていくことが大切ということであった。さらに

繰り返し強調して述べた言葉としては「帰属感」という言葉があった。子どもたちがコミュニティの一部であるという安心感、お互いに共感できることは特色ある教育を進める上で大切で、そのため小学校は大変温かい雰囲気であるということであった。学年をまたいでの活動は学校が休みの期間が中心のようであり、普段の活動は学年をまたがずに行うことが多い様子である。

４　キャンパスツアーにみる UWCSEA の特色とその様子

今回の視察では主に High School の施設を中心に見学することとなっていたが、校内の施設は他の学年にもオープンとなっていて、授業の合間の子どもたちは学校の様々な場所で遊び、その場所で過ごしている雰囲気、そして子どもたちの声と活気に満ちた様子が印象的であった。

教室の入る建物の外にある様々な教室棟をつなぐ屋根のついたオープンスペースには、足元の所々に黄色い線が描かれてボールを使って遊ぶことができるようになっていたり、ラケットとボールが置かれていたりした。これは遊びを通してお互いに共感したり、帰属感を持たせたりするような Outdoor Education の細かい配慮のように感じられた。また、生物多様性や洪水対策などについて学ぶ起伏のある植栽スペース、ハーブガーデン、雨林帯の木々の苗を育てて学んでいる区域（図 6）もあり、体験を通して学ぶ校内の仕掛けが非常に多く設置されていた。今回の視察の柱でもある ICT や STEAM に関連の深い校内の様子を 2 か所のみ以下に紹介する。

(1)　Design and Technology Center

図７ Design and Technology Center

図８ Design Brief の掲示

Design and Technology Center（図 7）にはプロ仕様の製品設計ソフトにもアクセスできる 3D プリンターやレーザーカッターなどの設備が整っている。また、ミドルスクールの生徒たちが使用するフードテックの教室やサービス・ラーニングのプログラムも整っている。この設備を整えるには相当な予算が必要であり簡単に真似できるものではないが、探究的な学びへの子どもたちの意欲を支えるものとして、この Design and Technology Center へ向かう階段にある Design Brief の掲示（図 8）が目にとまった。内容は鳥の生息地の減少の問題を解決するために 4 年間の鳥のライフサイクルに使用できる設計にしたことや、

簡単に清掃して組み立て直すことができるなど、形や機能についてのデザイン、アイデアだけではなく、ターゲットとするマーケットについて、値段についてなど経済的な持続可能性にも考えを巡らせていることがよくわかるものであった。

生徒の作品との成果を大切に扱うこと、多面的・多角的な思考を持ちながら、それを頭の中で考えることだけで終わらせるのではなく、自分の手を動かし、試行錯誤しながら形にしていくことが探究的な学びを進める上で欠かせないと感じた。

(2)　IDEAS HUB

IDEAS HUB（図 9、10）はよりよい世界をつくるための探究、革新、協力、そして持続可能な解決を地域社会に刺激し、サポートする場でもあり、地域に開かれている。この中にある central maker-space と呼ばれる空間は授業時間も課外活動でも使用されている。動画を作成するためのグリーンバックのスタジオや作業空間、ロボットプログラミングを試すことにできる空間も確保されていた。私の勤務校にも情報教室があり、授業でもロボットプログラミングを取り入れているが、その授業空間が作業の場やイノベーションのために必要な他の素材やスタジオなどと繋がり、さらにそれが地域社会に開かれていることは STEAM 先進国のシンガポールらしい発想であると感じた。

図９　IDEAS HUB の様子①

図 10　IDEAS HUB の様子②

５　おわりに

国際バカロレア（IB）認定校としての UWCSEA は G7 以上で IB プログラムを実施しており、G6 以下では IB プログラムに接続するような独自の教育計画を策定しているとのことであった。シンガポール当局の査察も入っているということであったが、かなり学校側に自由度の高い教育プログラムの設計を認めている様子であった。これら特徴ある教育も視察先で必ず耳にした「シンガポールの発展は人材の育成にかかっている」という言葉に沿って、教育についての実験と実践、その振り返りと更新がスピード感を持って進められている。UWCSEA の視察は多様なルーツを持つ人々が暮らす社会の中で、よりよいものは何か、社会の中に関わりながら自分の力を発揮してイノベーションを生み出す子どもたちを育てる教育の挑戦が生き生きとした営みとして感じられた。